

建長寺道隆への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

夫ぶつかくのき仏閣軒を並いべ法門屋いたごとに拒けんる。仏法の繁し栄は身毒な・尸那にも超ぎょう過し、僧宝の形儀は六通の羅漢の如し。然りと雖いえども一代諸経に於て未だ勝劣浅深を知らず。併しかしながら禽獸きんじゅうに同じ、忽たちまちに三徳の釈迦如来を抛なげうちて他方の仏菩薩を信ぎやくるず。是豈か逆路伽耶陀の者に非やずや。念仏は無間地獄の業、禅宗は天魔の所為、真言は亡国の悪法、律宗は国賊の妄説と云云。

爰ここに日蓮去ぬる文応元年の比ころ、勘へたるの書を立正安国論と名づけ、宿屋入道を以て故最明寺殿に奉りぬ。此の書の所詮は、念仏・真言・禅・律等の悪法を信ずる故に、天下に災難しき頻りに起こり、剩あまつさへ他国より此の国を責めらるべきの由之を勘へたり。然るに去ぬる正月十八日牒状到来すと。日蓮が勘へたる所に之少しも違はず普合せしむ。

諸寺諸山の祈禱の威力滅する故か。將はたまた又悪法の故成るか。鎌倉中の上下万人、道隆聖人をば仏の如く之を仰ぎ良観聖人をば羅漢の如く之を尊む。其の外寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢心がまんしんじゅうまん充満、未得謂為得」の増上慢の大悪人なり。何ぞ蒙古国の大兵を調伏じょうぶくせしむべけんや。剩へ日本国中の上下万人悉く生け取りと成るべし。今生には国を亡ぼし、後生ごしょうには必ず無間に墮せん。日蓮が申す事を御用ひなくんば後悔之有るべし。此の趣きを鎌倉殿・宿屋入道殿・平左衛門尉殿等へ之を進状せしめ候。一処に寄り集まりて御評議有るべし。敢へて日蓮が私曲あの義に非しきよくず。只ただ経論の文に之を任す処なり。具つぶさには紙面に載せ難し。併しかしながら対決の時を期す。書は言を尽くさず。言は心を尽くさず。恐々謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮花押

進上 建長寺道隆聖人侍者御中